

いちのせきから ストップ温暖化

eco 第7号

発行
一関地球温暖化対策地域協議会(IEL)
平成21年12月15日

張りつめた空気の中 柳下先生が講演

11月21日、当協議会主催の講演会とワークショップが上智大学大学院地球環境学研究科柳下正治教授をお迎えして開催されました。「低炭素社会づくりに地域においてどうチャレンジすべきか」と題する約2時間の講演に当協議会の会員を中心とする約50名が熱心に耳を傾けました。以下に、講演内容の一部を紹介します。

経済社会の変革を

温暖化の進行を防ぐには、科学の要請に基づくCO₂など温室効果ガスの大幅な削減が必要であり、その基本はエネルギー供給段階での脱化石燃料化、利用段階での徹底した省エネです。そして、啓発だけでなく、いかに実践し良い事例を示せるのが重要となっています。また、技術革新と共に、行政と協働した地域における市民の活動による経済社会の変革が必要です。

全ての分野で対策を

温暖化対策のメニューは広い分野にわたって豊富にあります。環境に関心のある市民や環境行政部局だけの取り組みでは十分ではありません。一関市の総合計画や都市計画、商工・農林業政策など全施策分野に関して温暖化対策の視点で総点検することが必要です。

大胆な政策変更を実現していくためには市民参加による社会的合意形成が前提となり、市民、事業者、議会、行政の協働が求められます。EU諸国では建設的な「うるさい市民」が市長、議会を動かし都市の構造を変えさせた例もあります。



柳下正治教授 ○環境庁を中心に、約30年間環境行政に関わる
○国立環境研究所 環境研修センター所長 名古屋大学大学院環境学研究科教授を経て現職

行動を誘導する地域社会を

私たちにはわかっているけれども行動に移せないことがあります。例えば、自家用車を使わないようにしたくても、駅から遠い、バスの便が悪いなどやむを得ず使っています。公共交通を充実させ利用者を増やすには？街の中心部に暮らしの拠点を集中させ賑わいを取り戻すには？など難題ばかりです。それでも、個人・組織がCO₂排出削減に結びつく行動を自然にとることができる地域社会を築きあげることが必要です。

新しいビジネスチャンス

私たちは地球の環境・資源・エネルギーの制約から経済社会構造の転換を余儀なくされています。再生可能エネルギーに関する産業が成長し、省エネ住宅・製品の普及も進むでしょう。それにつれ事業者は研究機関など共に地域社会と連携し、地域の産業を新たに創出することにも力を注がなければなりません。

IELからのメッセージ

ワークショップには当協議会の会員を中心に環境審議会委員など5グループ30人が参加し、「協議会の戦略的方向と2年後の活動」について熱意溢れる議論がなされました。各グループからの発表では「議会や行政の協力を得て、大胆な施策導入をする」、「菜の花を栽培し搾油→食用→バイオディーゼル燃料へと地に着いた循環型社会を目指す」など多岐にわたる提案がなされました。当協議会ではこれらの発表を生かし、中長期的な方向を検討した上で、一人ひとりの市民の方々と協働できる活動を実践したいと考えています。



温暖化対策のあり方について真剣に議論する参加者

取り戻そう 森林と共生する暮らし

山に登り山頂に着くと、広大な景観のすばらしさを体感できます。また、樹林帯に下ると何とも言えない安堵感を覚えます。私たちが森を頼りに長いこと暮らしてきた年月がDNAに刻まれ、安らぎを感じさせてくれるのかも知れません。

他方、大都会ではビルが林立、地上・地下に鉄道が交錯し、道路には絶え間なく自動車が走り、夜も灯がついています。化石燃料に頼った人工都市が、森の存在などなくとも続くように見えますが、果たしてそうでしょうか。飲み水は森に降った雨が運ばれ、食べ物は森が生み出した肥沃な土壌の恩恵により供給されています。結局、私たちはどこに住もうと森の恵み無しには暮らすことができないのです。

下草も生えず、土砂崩れを防ぐという本来の機能を大幅に低下させ、松枯れが私達の身の周りでも進行しています。他方、広葉樹林は手入れが行き届かずヤブ化して、かつての環境が崩れ姿を消す動植物も多くなっています。



森林の利用で整備が進む

化石燃料は、石油41年、天然ガス65年、石炭155年^(注1)でいずれ枯渇すると言われていています。従って再生可能な森林の利用は必然です。薪ストーブを利用すれば1台当たり年間約6m³の薪を消費し、それを灯油に換算すれば1,200リットル^(注2)です。その灯油が排出する二酸化炭素は3トンと計算され、その結果薪ストーブを利用することによりその分の二酸化炭素が削減されることになり^(注3)ます。また、同様にチップやペレットの使用も、二酸化炭素の削減が大いに期待できます。

天然乾燥の木材は大量のエネルギーを消費して作り出される鉄、アルミニウム、コンクリートに比べ、最も省エネルギーな住宅資材であるとともに、ぬくもり、香りが、豊かな生活空間を生み出します。また、木材は膨張や収縮を繰り返すことにより湿度を調整することができ、日本の風土に適したすぐれた建築資材です。国土の7割が森林に覆われた日本で暮らす私達が、国産の木を使うことにより森林の整備が進みます。里山林の手入れが進みます。

二酸化炭素吸収源として森林の再生を

京都議定書によると二酸化炭素6%削減の約束のうち、3.8%が森林による吸収で見込まれています。しかし、最近の報道によれば、手入れが十分ではなく2.9%分しか見込めないとのことで、太陽光をふんだんに受けて二酸化炭素を吸収する森林の育成が求められています。

岩手県では県民一人当たり千円の森づくり県民税を徴収しています。それを財源として、針葉樹と広葉樹による混合林への誘導を目的とした間伐に助成をしています。この事業を大いに活用し各地域で美林の郷一関を目指すことが、雇用情勢を改善する助けになるかもしれません。

(注1) eco検定公式テキスト 図表2-42 世界のエネルギー資源確認可採埋蔵量と可採年数より
(注2) 東北大学大学院環境科学研究科 新妻研究室、河北新報 09年7月30日より
(注3) 薪を燃料にしても二酸化炭素は排出されますが、元々大気中にあったものが樹木に吸収されて燃やすことによって再び大気中に戻るのみであり、地球温暖化には影響を与えないとされています。



太陽光が射し明るい『間伐実行林』(花泉町金沢)

森の役割

1 大雨の時は水を蓄え、後に地下水としてゆっくり川に流します。



2 土中にはりめぐらされた木の根が土砂崩れなどの災害を防ぎます。



3 きのご等の菌類や鷲等の猛禽類まで多様な動植物の生息地です。



4 住宅用資材としての木材を供給します。



5 薪や炭、チップやペレットなど再生可能燃料の供給基地です。



6 光合成により大気中の二酸化炭素を吸収して成長することにより、地球温暖化防止の役割を果たします。

手入れが行き届いていない森林

一関市では旧市や旧町村の中心部を除き、周辺には里山と称される農村地帯が広がっています。プロパンガスや家庭用灯油が普及する1960年代以前は薪や木炭が燃料として利用され、里山林は貴重な燃料資源でした。また、その頃までは国産材の利用も多く自給率も50%を超えていたので、手入れが行き届いた林が形成されていました。

しかし、今ではエネルギー源として利用される樹木はわずかとなり、価格の安い輸入材に押されて木材自給率も20%程度となった結果、里山林の多くが放置され、荒れてきています。杉などの人工林の一部は間伐が進まず林内が暗く、

NPO法人どんぐり協会

平成17年10月に法人として活動を始めました。その理念は「緑の環境を守り、美しい景観を創出する」ことです。具体的には次のような活動に取り組んでいます。

(1)山菜、木の実、雑穀栽培等で趣味と実益を追求しながら緑の環境を守る。
(2)楽しい森づくり。春には山菜、夏は花、秋にはキノコ、紅葉が楽しめ、子どもが遊び、鳥が舞い、実のなる木を植えて野生動物が食べることに困らない森を目指します。「あなたも今日から森林人」「人の緑化運動」森林の癒し効果は心身両面に発揮され、メタボ対策やストレス解消効果が期待できます。一人でも多くの方々に森林に足を運んでもらって、その爽快感を味わって欲しいと思っています。

クヌギにこだわる理由

「コンクリートのダムはもういらない。緑のダムを作ろう」を合言葉に保水性抜

群の落葉広葉樹のクヌギ、ブナの苗木を植える「どんぐりの森づくり大作戦」を展開。クヌギにこだわる理由は、他の広葉樹の1.5～2倍の成長量でCO₂(二酸化炭素)の吸収量が抜群。温暖化防止のチャンピオンです。しかも植林してから15年で伐採可能、以後その切り株からの萌芽更新で再造林の費用をかけずに継続的にクヌギ林を維持できます。また、クヌギのホダ木からは最高品質のシタケが生産されます。しいたけはコレステロールを下げたり、高血圧や動脈硬化の予防などにも効果があるといわれ、困窮している林業と健康が気になる現代人の救世主となり得そうです。

緑のダム植樹祭

2年前から大東町と千厩町にまたがる立石山(354m)を中心に実施しています。1回目は昨年3月に一般公募で約200



人、2回目は今年3月に同じく約100人、3回目は9月に東磐井ライオンズクラブなど約30人、4回目は11月に千厩中学校3年生約130人が参加して植樹しました。県民のみなさんからの森林税や県企業局の支援、地元企業、団体からの協賛金などにより行われ、そのご厚意と参加者の笑顔が活動に弾みをつけています。

山は人間の本能に直接語りかけるようです。人々が健康であること、山々が健康であること、これらが廻りまわって温暖化防止につながると確信しています。

お問い合わせ

☎72-3055(菅原)

風力と太陽光を利用した街灯が設置されました

道の駅かわさき、館が森アーク牧場、館が森高原ホテル、岩手サファリパークに計4台の風力と太陽光のハイブリット発電装置が設置され、そこで作られた電気は駐車場への照明や防犯用の照明として使用されています。

このうち、道の駅かわさきでは、薄衣小学校のみなさんらによるテープカットが行われ、身近にできた新エネルギーの設備に興味を持った様子でした。

道の駅かわさきは年間110万人余の利用者がある県内屈指の道の駅であり、利用者はもとより、地域のクリーンエネルギー啓発のシンボルとして、また、水害時の非常用電源としての利用を目的に、岩手県企業局クリーンエネルギー導入支援事業を活用し設置されました。

皆さんもお近くをお通りの際は、ご覧ください。



☆親子自然観察会 in 唐桑

一関地球温暖化対策地域協議会主催の親子自然観察会(共催：オフィス古紙リサイクル一関)は、去る10月24日(土)に気持ちの良い秋晴れの空のもと、気仙沼市唐桑町の「NPO法人森は海の恋人」の養殖場で開催され、海の生き物観察や、カキの養殖体験などを行いました。

市内の小学生とその家族など20人が参加し、同法人の副理事長である畠山信氏より海の生き物の生態について説明の後、クラゲやヒトデ、ウニやカキなどを初めて触る子どもからは絶叫に似た歓声が響き、終始楽しい雰囲気の中でゆったりとした時間が過ぎていきました。

和船「あずさ丸」に乗り込んだ参加者は、力を併せて船を漕ぎ、カキの養殖いかだに到着。いかだでは養殖の仕組みを観察しながら、獲れたてのカキやホタテをいただきました。

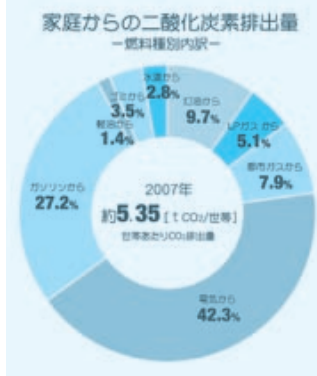
その後、漁船に乗り込み、室根町から注がれる大川の河口付近へ移動し、プランクトンを採取する道具を使い実際に採取してみました。6月には室根町の森林で「森は海の恋人植樹祭」が行われ、今年で21年目を迎えており、こうした取り組みにより整備された森林からの栄養が海に流れつき、それによっておいしいカキが生産されるとの説明を受けた参加者は、森・川・海が一つにつながっていることを実感し、より一層自然環境を大切にしようと決意した皆さんでした。



家計を助ける環境家計簿

～おたくはCO₂どれくらい排出していますか？～環境家計簿を
つけてみましょう

eco第6号(9/15号)の環境家計簿はご存じですか！

電気やガスの使用量から家庭でのCO₂の排出量が簡単に計算できるものです。ぜひ取り組んでみてください。① 増えている家庭からのCO₂排出量！1世帯のCO₂排出量全国平均(2007年)は年間5.35トンで1ヶ月平均446kgです。岩手県は全国平均より多く、7.5トン(2005年)となっています。

出典)温室効果ガスインベントリオフィス

家庭からの排出量は年々増えており、1990年からの17年間で41.1%増となっています。政府は2010年までの家庭での削減目標を20%以上としており、まさに家庭からの温暖化対策が急務となっているのです。

② 排出量を意識することで始めよう削減努力

各項目の昨年対比をみてみましょう。そして年間の排出量を全国、岩手県とも比較してみましょう。そしてムダがないかどうか、使用量を減らすには何ができるか考えてみます。

③ まずは『節約』！次は『新たな選択』！そして『くらし方の転換』！

電気をこまめに消す。厚着で室温を低く。窓や床に断熱資材を使用し寒さ対策などエネルギーの節約に心がけます。さらに省エネ家電や電球型蛍光灯への買い替え、エコキュートの導入、ハイブリット車などの燃費の良い車へとステップアップしてみて、薪やペレットによる暖房を取り入れたり、断熱リフォーム、太陽光発電の導入などへの転換も考えてみましょう。基本は「節エネ」の意識が大事ですが…

④ 提出期限に注意！環境家計簿の学習会も企画できます

提出期限は以下のとおりです。提出後、診断結果をお送りします。また、抽選で20名様に図書カードを進呈しますので楽しみに。

また地域や団体などで環境家計簿についてもっと詳しく知りたい場合は、学習会の講師を派遣しますのでぜひ活用ください。

抽選で図書カードがもらえます！

締め切り	平成21年10月分	平成22年1月15日
	平成21年10月～12月分	平成22年2月1日
	平成22年1月～12月分	平成23年2月1日

●問合せ 21-8342(事務局)

●提出先 FAX 21-2101 または

本庁生活環境課 各支所市民課

第3回エコ8カップ

エコ8カップ

「審査員奨励賞」を受賞

11月8日、盛岡「アイーナ」で第3回エコ8カップの代表選考会が行われました。これは地域の創意工夫を活かした地球温暖化防止につながる取り組みを全国から募集する「ストップ温暖化一村一品大作戦」(環境省事業)、その岩手県版です。

第1次選定会を通過した当協議会も、これまで取り組んできた、広報ecoの発行、環境家計簿、薪ストーブ、子供服無料交換会、エコ友チャレンジ、てんぷら油の回収などの活動について発表しました。審査員からは県内でも有数の取り組みであることを評価いただき、今後の期待も込め「審査員奨励賞」を頂きました。

当協議会以外では、企業における自然エネルギーの導入、高等学校における環境教育、市役所での自転車通勤、小学校での植物のカーテン、生協でのCO₂削減の取り組み、等々が紹介され、あらためて取り組みの多様性と各団体の工夫に感心したところです。

なお、優勝は岩手子ども環境研究所の廃校を活用したエコスクール「森と風のがっこう」の実践例でした。



クルマと公共交通機関などの買い使い分けをめざして

～減クルマチャレンジウィークinいちのせきが実施されました～

一関市と岩手県公共交通利用推進協議会では、CO₂排出抑制と公共交通の利用推進を図るため、クルマと公共交通機関などのかしこい使い分けに挑戦する「減クルマ」チャレンジウィークを実施しました。

今回、盛岡市以外では初めて一関市で開催し、63事業所で行っていただきました。

取り組み結果につきましては後日、お知らせいたします。



実施期間／平成21年11月9日(月)から11月15日(日)まで

チャレンジウィークの内容／日常の生活行動(勤務体系や交通手段等の状況)に合わせて、「ムリなく」、「できる範囲」で、クルマの利用抑制にチャレンジしました。

区分	取 り 組 み 例
通勤・仕事での「減クルマ」	○普段クルマで通勤している場合、期間中は電車やバス、自転車、徒歩など、環境にやさしい交通手段で通勤してみる。 ○仕事において、普段クルマで出かけるところに、バスや自転車などを利用して出かけてみる。
私生活での「減クルマ」	○私生活において、買い物やレジャー等で出かける際にクルマの利用を抑制してみる。
ドライブ中の「減クルマ」	○通勤・仕事や私生活において、クルマを利用しなければならない場合に、省エネ運転(エコドライブ)を行ってみる。

編集後記

柳下先生のお話によれば、温暖化に対する私たちの活動はゴールの無い駅伝とのことです。一人のランナーとしてできることのすべてをやり切って、次世代にたすきを渡そうと思います。(佐々木勝裕)

『一関地球温暖化対策地域協議会』会員募集！

みなさんのアイデアを活かしてみませんか？ ●入会方法・お申し込みは事務局まで(21-8342)
●年会費 個人500円、企業・団体一口5,000円

企業・団体 28 個人会員 63 (平成21年12月1日現在)